

日清国交樹立前後から日清戦争前までにおける 日本人紀行文の天津認識

Japanese Perceptions of Tianjin in Travel Writings: From the Establishment of Sino-Japanese Diplomatic Relations to the Eve of the First Sino-Japanese War

徐 爽*

XU Shuang

(要旨)

本稿は、1870年代初頭の日清修好条規締結期から1894年の日清戦争勃発直前に至るまでの日本人紀行文を対象に、当時の天津認識がいかに形成・変容したかを考察するものである。初期の紀行文では、天津を北京への通過地として扱う簡略な描写が多かったが、李鴻章が当地を拠点に外交・軍備近代化を推進するにつれ、外交要衝や軍事拠点としての性格が強く意識されるようになった。また、租界や鉄道建設を中心とする近代化が進む中、天津は華北の経済・交通の要所として再評価され、日本人旅行者や官民調査団による市場調査や軍事偵察が積極的に行われた。本稿では各種紀行文に散見される記述を精査し、国際的地位・軍事・経済・社会の四側面における天津認識の変遷を分析する。紀行文に蓄積された天津像は、清国の文明的限界を象徴する認識を支え、日本の対清戦略や対外認識の形成に一定の役割を果たしていたことを明らかにする。

キーワード：天津認識、日本人紀行文、日清関係史、中国観

はじめに

天津は、近代中国において最も早期に対外開放された北方の重要都市の一つである。地理的には北京に隣接し、渤海に臨む戦略的要衝として、明代の建城以来、交通の要衝・軍事の拠点として機能してきた。19世紀後半に入ると、天津はさらに多面的な機能を備えるようになり、列強による領事館や租界、商会、軍隊の拠点であると同時に、清朝が洋務運動を通じて西学¹を試行し、学堂²を設立し、軍需を製造する「近代化の試験場」とし

て発展した。張利民³は、天津が清末の対外関係体系において外交・軍事・経済の各面で中心的機能を担った「北方の門戸」であったと指摘している。したがって、天津は中国近代史における不可欠な存在であり、海外との接触と権力構造の変動を観察する上での重要な窓口ともなった。

とりわけ明治期の日本にとって、天津は特別な意味を持っていた。1871年の日清修好条規の締結は、日中関係を正式な外交関係へと転換させる契機となり、その前段階として、1870年には日本から使節団が天津に派遣

* 山口大学大学院東アジア研究科博士課程 (The Graduate School of East Asian Studies, Yamaguchi University)

され、条約交渉を通じた初の正式な対清接触が行われた。その後、日本から天津を訪れる者は年々増加し、外務官僚、軍人、商人、新聞記者、留学生、旅行者など多様な属性にわたった。彼らは天津を起点に中国の政治・軍事・経済・社会風俗を観察し、その見聞を紀行文という形で記録した。

これらの紀行文には、現地での調査結果や統計数値を伴う報告的記述と、主観的印象や感想を反映した記述が併存しており、単なる事実の記録にとどまらない。その主観性こそが、当時の日本人による中国観の特質を浮かび上がらせる手がかりとなる。また、外務省記録や軍報などの公的文書と異なり、紀行文は筆者個人の視点から現地の実情を具体的に描写しており、政策の受容や統治の実態を把握する上で独自の役割も果たす。したがって、紀行文は、日本の中国観が抽象的想像から具体的理解へ、感覚的評価から戦略的判断へと移行する過程を捉える重要史料となっている。

日本人による中国観に関する先行研究は、「中国観」や「中国認識」「中国像」「支那観」など多様な用語を用いて展開されてきた。本稿では、「対清観」「中国認識」「中国観」などの用語と重なる側面を含みつつも、便宜上これらを広義の「中国観」として統一的に用いる。なかでも、日清戦争が中国観に決定的な転機をもたらしたとの見解は、日中双方の学界において広く共有されている。たとえば、安藤彦太郎⁴は日清戦争を契機として日本人の間に侮蔑的な中国観が浸透したと述べ、小島晋治⁵や並木頼寿⁶も、同様に戦争を挟んで中国に対する意識が「畏敬」から「侮蔑」へと急速に変化したと指摘している。また、中国学界においても、楊棟梁⁷、劉岳兵⁸が指摘するように、1840～1895年の日本人の中国観が「質疑」から「蔑視」へと推移した

とする段階論に基づく分析が主流となっている。

こうした観点から、近年では紀行文を対象とする中国観の研究も現れている。例えば、陳奉林⁹は、明治以降に日本人が多様な身分で訪中し、中国の政治・経済・文化・軍事を実地調査した結果、多くの紀行文が「勘察記」として機能し、近代日中関係研究において「不可欠な史料」であると論じている。張明杰¹⁰も、明治期の紀行文の分類と記述特徴を整理し、それらが異文化記録としての形式だけでなく、国家的戦略意図をも担っていたことを指摘する。また、王鳴彦¹¹と于晴晴¹²、李鈴¹³、潘月剛¹⁴らは、日本人紀行文における中国像の分析を通じて、それが日本人の文化的優越意識や帝國的自己認識の構築に寄与していたことを指摘している。しかし、これらの研究の多くは全体的・抽象的な中国観を論じており、特定の地域や時期に焦点を当てた体系的な分析は未だ十分とは言えない。加えて、使用されている史料の大半はすでに中国語に翻訳された一部の紀行文に限られており、史料の対象領域やその量においても限界がある。さらに、対象とされる紀行文も曾根俊虎、岡千仞、内藤湖南といった政治家や著名知識人に集中しており、軍人、外務官、実業家、旅行者など多様な著者層にまで視野を広げた研究は少数にとどまる。加えて、日清戦争という中国観の転換点を中心に据えて時期を設定した分析も少なく、この臨界期における具体的な認識の蓄積過程は未だ十分に明らかにされていない。

一方、天津に関する既存研究も同様の問題を抱える。李文璐¹⁵、靳佳萍¹⁶は、日本人紀行文における天津租界や茶葉貿易、文化交流に注目して個別的な考察を行っている。しかしながら、李は五か国の紀行文を参照しつつも、主に社会風俗の描写に焦点を当ててお

り、「近代」という時代設定の曖昧さが残る。斬佳萍による関連研究においては、日本人紀行文の使用は数篇に限られ、しかも翻訳された二次資料が中心であり、個別描写の一般化という問題が見られる。いずれの研究も、紀行文全体を通じた認識の変遷や、政治・経済・軍事・社会といった多面的分析には十分に踏み込んでおらず、「天津認識」の全体像を描き出すには至っていない。また、分析の深度や理論的視座においても、使用史料の限定性、記述内容との乖離、ならびに方法論的枠組みの曖昧さといった点に課題が残されている。

その他、芥川龍之介や金子光晴といった文学者の中国体験に基づく天津研究も一定数存在する。例えば、姚紅¹⁷は芥川の紀行文・書簡・随筆を用いて、天津に対する惜別の情感とその文化的表現を論じ、陳淑梅¹⁸は金子の随筆『没法子——天津』を通じて彼の中国観を考察している。また、李煒¹⁹は文学者の都市記述を分析対象としている。しかし、これらの研究は文学的・個人的色彩が強く、同時期に日本のさまざまな立場の人々によって形成された多面的な天津認識を十分に捉えるには限界がある。

以上のような先行研究の動向と課題をふまえ、本研究では、日本人の中国観が具体的に集積されていた地域の一つとして天津に注目する。紀行文に記された天津認識の通時的変化を検討することにより、近代日本における中国観の構造的転換を、実証的かつ地域的視点から明らかにすることを目的とする。張明杰の定義によれば、「紀行文」とは、日記と見聞録、調査書、復命書、地誌、詩文などの記録を広く含むものである²⁰。本研究ではこの定義を参考に、1870年から1894年までに日本人が天津を訪れた際に残した21本の紀行資料を対象とする。刊行された記録資料を主た

る分析対象とし、未刊行資料は補助的に用いる。もっとも、本稿の関心は、これらの紀行文が当時の日本社会に実際にいかなる影響を与えたかを実証的に解明することにはない。ただし、刊行された資料は、少なくとも当時の読者に流通しうる形式で発表された点において、当時の日本社会における「中国観」形成に影響を与える言説であると考えられる。ゆえに、それらは当時の中国観の一端を読み解くための、代表的かつ有効な分析素材となりうる。また、対象とした資料の中には、他人の見聞を再編した二次的記述や編纂物も含まれるが、それが共有されたイメージを再構成し、広める機能を担っていた点で、分析の対象とするに値する。

対象とする紀行文の著者の多くは、外務官、軍人、記者、留学生、旅行者などであり、彼らの記述は実用性・情報性・観察性を兼ね備えている。それゆえ、これらの資料は、日本人が天津を観察した経験や評価を記録した言説として、来華日本人による天津認識の形成過程を読み解くための貴重な素材となる。従来の文学者中心のアプローチや断片的な主題別の研究を超えて、本稿は、いくつかの視点から、日本人による天津認識の時代的変遷を理解することにより、その全体像を再構築することを目指す。

研究対象期間として設定した1870年から1894年は、歴史的にも重要な意味がある。既存の中国観研究においては、分析対象とするこの時期が「明治期」や「19世紀末」といった漠然とした表現にとどまり、外交的な転換点であったことを明示的に捉える研究は少ない。楊棟梁²¹はアヘン戦争から日清戦争までの日本における中国観の変化を「質疑から蔑視へ」の漸進的な移行として整理している。しかし、その中で、1870年の訪清使節派遣および翌年の日清修好条規締結が、日本におけ

る中国観を実地に基づくものとして確立し、外交関係の制度化を意味する重要な節目であった点については、十分な検討がなされているとは言い難い。本研究は、まさにこの視点の補完を意図するものであり、日清修好条規締結という外交的節目以降に形成された天津認識を通じて、日本人が中国をいかに把握し、それをいかなる認識枠組として構築していたのかを明らかにすることを目的とする。

本研究は、以上の時期と資料をもとに、日清修好条規締結以降の紀行文を国際的地位・経済認識・軍事観察・社会印象の四側面から分析し、明治日本における天津認識の深化過程を追う。最終的に、本稿は以下の結論を導くことを目的とする：すなわち、当時の日本人による天津の多面的な観察と評価は、単なる地域的関心にとどまらず、清国全体に対する理解枠組みへと展開し、日本人の対清認識の一端を構成する言説的基盤を形成していたと考えられる。天津という都市は、清国の制度的・文明的成熟性を測る象徴的な断面として機能し、紀行文に蓄積されたそのイメージは、近代日本における中国観の構造的形成過程を読み解く上で重要な手がかりとなる。なお、本稿は紀行文が日本の対清政策や世論にいかなる影響を与えたかを直接検証するものではなく、あくまでその記述が示す認識構造に注目するものである。

一、紀行文の概観

日本人の天津認識の展開過程を明らかにするには、まずどのような人物が、どのような時期に天津を訪れ、何を記録したのかを把握する必要がある。本稿では、1870年から1894年にかけて天津に言及した日本人紀行文を収集し、書名と著者、出版年、訪中期間、著者の属性、天津に関する記述内容の六項目について整理を行った。

対象とした21篇の紀行文は、出版年代および著者の訪中時期に基づき、概ね三期に分類できる。すなわち、①日清修好条規締結直後（1870年代）、②清仏戦争前後（1880年代以後）、③日清戦争前夜（1890年代）である。こうした時期区分は、日本人の天津観察の視点や関心がどのように推移したかを分析するうえで有効である。

天津に関する記述は、主に「国際的地位」「経済」「軍事」「社会」の四分類に整理した。記述対象の分類にあたっては、単なる言及や事実の列挙ではなく、天津の実態に対する具体的な描写や評価が見られる場合に限り該当項目に「○」を付している。とりわけ「国際的地位」には、天津の外交拠点としての機能、李鴻章の政治的影響力に関する記述を含めた。以下に整理した一覧（表I）を通じて、訪問者の背景や記述の時期的分布、関心の多様性を視覚的に確認できる。

表 I 日清国交樹立前後から日清戦争前までにおける日本人の天津関連紀行文一覧²²

書名	著者	出版年	著者の属性	属性	訪中間	天津に関する記述			
						国際的地位	経済	軍事	社会
『使清日記』	柳原前光	1871年	外務大丞	A	1870年	○		○	○
『清国紀行桑蓬日乗』	石幡貞	1871年	漢学者	C	1871年				○
『支那通商必携』	満川成種	1873年	大蔵省附属	A	1871-1872年		○		
『北支那紀行』	曾根俊虎	1875年	海軍軍人	A	1875年から複数回訪中	○	○	○	○
『清国地誌』	岸田吟香	1882年	ジャーナリスト、実業家	C	1868年から複数回訪中		○		
『支那総説』	金子弥兵衛	1883年	明治期の官僚、満州開拓者、実業家	A	不明		○	○	
『第一遊清記』	小室信介	1885年	自由民権運動の推進者、記者	C	1884年	○		○	
『観光紀遊』	岡千仞	1887年	漢学者	C	1884年			○	
『支那地誌』	参謀本部管西局	1887年	軍事戦略の立案・情報収集を任務とする機関	A	不明			○	
『禹域通纂』	井上陳政	1888年	官費留学生	B	1882年		○	○	
『在清国見聞随記』	後藤昌盛	不明	留学生	B	1884年		○	○	
『漫遊見聞録』	黒田清隆	1888年	軍人、政治家、内閣総理大臣	A	1885年	○	○		
『北清見聞録』	仁礼敬之	1888年	興亜会メンバー、留学生	B	1883-1886年		○		
『三円五十銭世界周遊実記』	依光方成	1891年	不明	C	1885年	○		○	○
『清国通商総覧』	日清貿易研究所	1892年	情報調査者	A	1886-1896年		○	○	○
『支那漫遊実記』	安東不二雄	1892年	財政史学者	C	1891年		○		
『北征録：附・共遊草』	末広重恭	1893年	政治小説家、在野政治家、新聞記者	C	1892年		○	○	○
『東亜各港誌』	参謀本部編纂課	1893年	軍事戦略の立案・情報収集を任務とする機関	A	不明		○	○	○
『亜細亞大陸旅行日誌并清韓露三国評論』	原田藤一郎	1894年	不明	C	1892年	○	○	○	○
『清国軍備総覧』	長谷川雄太郎、七里恭三郎	1894年	中国研究者陸軍通訳官、留学生通訳として従軍し	A	1887年以降			○	
『北支那朝鮮探検案内：附・朝鮮事件由来』	波多野承五郎、杉山虎雄	1894年	前天津領事官、時事新報記者	A、C	不明		○	○	○

また、表では著者の属性について、政府・軍関係者 (A) と留学生 (B)、非政府系の知識人・一般人 (C) の三類型に分類し、各紀行文に記号を付して示している。これは、筆者の出自や訪中目的の違いが、天津に対する観察視角や評価にどのような影響を及ぼしているのかを分析するためのものであり、あわせて異なる属性間で共通する記述傾向が存在するかを検討するための基礎作業でもある。

以下では、この表に基づいて、三つの時期における紀行文の属性と、それぞれの著者層に見られる記述の特徴について詳述する。

第一に、政府および軍関係者による紀行文が一定数を占めている。たとえば、柳原前光、満川成種、金子弥兵衛、黒田清隆、波多野承五郎は政府官僚として清国を訪れ、その記録には個人的見聞にとどまらず、日本政府の対清関心が投影されている。岸田吟香や荒尾精に関しては、諜報活動に関与した人物としても知られており²³、後者は1890年に上海で日清貿易研究所を設立し、名目上は貿易に携わる人材の育成機関であったが、実際には参謀本部主導による情報員養成機関であったと指摘されている²⁴。さらに、軍人である曾根俊虎や参謀本部編纂課による紀行文も、軍事偵察や戦略分析を意図したものであり、軍需施設・防衛体制・経済潜在力に関する調査的観点が色濃く反映されている。なお、長谷川雄太郎と七里恭三郎は、前者が参謀本部軍属として、後者が留学後に軍務に従事した経歴を持ち、両者による共著『清国軍備総覧』は、軍事的情報収集と戦略的分析を目的とした内容であることから、本稿では「政府および軍関係者」に含めて考察する。

第二に、留学生による紀行文も注目に値する。井上陳政は、大蔵省派遣の官費留学生として1882年に清国に派遣され、北京では著名な学者・俞樾に師事して古典文化を学んだ²⁵。

表向きは留学生としての活動であったが、実際には制度・軍政・経済に関する広範な情報収集を行っていたとされる。後藤昌盛は、清仏戦争の最中に清国を訪れた日本人留学生であり²⁶、滞在中には、軍事施設や農村の風景・生活、観光地などを視察・記録しており、その観察は比較的素朴なものながら現地の実態を具体的に伝えている。また、仁礼敬之も海軍省の留学生として清国を訪れ²⁷、財政や租税制度に関する実地調査を行っている。このように、彼らの紀行文には学術的記録という性格に加え、政策的・戦略的関心もうかがわれる記述が多く含まれており、留学生による記録として重要な意義を有している。

第三に、非政府系の知識人や一般人の紀行文も多く確認される。石幡貞、小室信介、岡千仞、依光方成、安東不二雄、末広重恭、原田藤一郎、杉山虎雄は、それぞれ漢学者、自由民権運動家、実業家、旅行者として天津を訪れ、都市環境、風俗、経済、教育など多面的な観察を記録している。彼らの記述には当時の日本社会の対中関心や世論の反映が見られ、民間知識層による中国理解の様相を把握する手がかりとなる。

このように、明治期に天津を訪れた日本人は、政府・軍関係者のみならず、知識人や旅行者など多様な属性を持ち、その観察視点も一様ではなかった。官民の視座が併存するなかで、日本人の天津認識は外交、軍事、経済、社会といった複数の側面から形成されていった。

本稿では、時間的推移を軸に、こうした認識の変化を具体的に追うとともに、それぞれの分野における記述内容の特徴を分析する。あわせて、政府関係者と民間旅行者の視点の差異にも注目し、近代日本人が天津という都市をいかに理解し、いかなる対中意識の枠組みの中に位置づけたのかを考察していく。

二、日本人紀行文における天津の国際的地位

アロー戦争後、清政府は外交事務を集中的に管理するため、1861年に総理各国事務衙門を設立し、同年には天津に三口通商大臣を新設して崇厚を任命した²⁸。これにより、天津・牛莊・登州の通商事務が統括され、天津は清末外交体制の中で特別な地位を占めるようになった。また、北京駐在の各国領事にも天津への移転が求められ、天津の国際的地位はさらに強化された。こうして、天津は外交の要地として発展し、清朝の対外関係に不可欠な都市となった。

(一) 天津教案の調査と初期の認識

1870年5月23日、天津で「天津教案」²⁹が発生し、清政府は曾國藩と李鴻章を派遣して事態の収拾にあたった。当時、明治政府は清国との正式な外交関係の樹立を模索しており、本件を重大視して使節団を派遣した。本節では、外務権大丞として清国派遣使節団の一員を務めた柳原前光による視察記録『使清日記』を主要史料として扱う。同書の序文によれば、柳原は本書の執筆目的を三点にまとめている。第一に、外交交渉や行程の実態を詳細に記録し、将来の外交実務の参考とすること。第二に、旅中の感慨を詩文に表し、文化的記録として残すこと。第三に、将来の条約交渉や国家戦略の資料として活用されることへの期待である³⁰。すなわち本書は、外交文書としての記録性や実用性に加え、紀行文としての抒情的性格も併せ持つ文献である。

柳原前光は、出発前に提出した上奏文の中で、「天津之一挙其末如何相成候哉モ難計、就テハ種々御手数モ有之急速其御運ヲモ難成³¹（天津における事件がどのような結果を招くかは予測しがたく、それに伴ってさまざま

まな手間が生じ、迅速に事態を運ぶことも難しい）」と述べ、天津教案の展開が予測困難であること、また処理には困難が伴う可能性を指摘していた。また、『使清日記』には「聞曾李両中堂大名既熟（曾・李両中堂の名声は、すでに広く知られていた）」との記述があり、来清以前から曾國藩・李鴻章両名の存在と重要性を把握していたことがわかる³²。曾・李両名は当時の清国を代表する大臣であり、本件において事態収拾のため天津に派遣された人物であった。こうした言動からも、柳原は天津教案を清国の外交能力を測る試金石と位置づけていたと考えられる。

使節団は天津到着後ただちに情報収集を行い、教会の廢墟を視察し破壊状況を記録した³³。また、アメリカ領事館経由で、清政府が斬首・流刑・賠償によって事態の収拾を図ったことを確認した³⁴。これらの観察から、柳原は清国政府の姿勢を弱腰かつ妥協的と判断し、列強に対する外交的な対応力の欠如に懸念を抱いていた。

当時、条約未締結国の使節は、天津において三口通商大臣の許可を得てから北京に入るのが通例となっていた³⁵。このような外交的慣例の存在を背景に、使節団は天津の交通事情や通商大臣の権限に対しても強い関心を示していた³⁶。これらの調査を通じて、日本側は天津を清朝政府との直接交渉に至るための制度的な入口、すなわち外交上の「玄関口」として認識していたことがうかがえる。

一方、上海に滞在していた清国官員・塗宗羸は、天津教案の余波による混乱を理由に、使節団に北上を控えるよう説得した。しかし、使節団はすでに二か月以上も交渉の機会を得られずにいたため、これ以上の遅延は外交上不適切であると判断し、独自の決断で天津へ向かった³⁷。天津では、国書を恭親王に直接手交するため、三口通商大臣・成林との

交渉を行った。柳原らは北京での直接面会を主張したが、成林は天津において通商大臣と協議を行うのが正式な手続きであり、北京行きは許可が下りるまで待機すべきであると主張した。さらに成林は、総理各国事務衙門の委任を受けた通商大臣として、天津において外国との外交実務を担当する立場であることを改めて強調した。使節団がこうした制度的立場を十分な理解を欠いたまま、直接進京を求めたことが、交渉の難航を招いた³⁸。その結果、最終的に総理各国事務衙門が、日清修好条規の改正要求を拒否し、交渉は膠着状態に陥った。

条約改正交渉が難航する中、柳原は成林・李鴻章との会談を重ねた。『使清日記』によれば、使節団は滞在中に五度李鴻章と会見しており³⁹、彼が交渉の中心人物であったことがわかる。柳原は李の第一印象を「鬚眉明秀、眼光射人（眉目秀麗であり、鋭い眼光を放つ）」と記し、さらに「英邁能断、西人亦称其能（英邁にして決断力があり、西洋人もその能力を称賛している）」と述べており⁴⁰、李の人物的力量を高く評価していた。つまり、柳原は李鴻章を清朝外交・内政の要と見なしていたことがうかがえる。

ただし、日本政府は当初、天津や李鴻章の重要性を十分に認識していなかった。たとえば、1874年の台湾出兵では事前に李との交渉は行われず、1875年に寺島宗則が天津への領事館設置を提案した際も、李の影響力は軽視されていた⁴¹。これらの事例から、天津は外交拠点として把握されてはいたが、長期的な対清外交戦略の中にはまだ組み込まれていなかったことが読み取れる。

総じて、日清修好条規締結初期、日本の外交官は天津を北京への関門と認識しつつも、その外交機能や影響力を過小評価していた。李鴻章の存在には注目していたが、天津とい

う都市がその後の清朝外交において果たす役割までは見据えていなかったと評価できるだろう。

（二）日本における天津の国際的地位の再認識

1880年代以降、日本の対清政策はより積極化し、それに伴い天津の地位も再評価されるようになった。李鴻章の影響力拡大により、日本側においても、天津は清政府の外交運営において独自の価値を持つ都市として認識され始めた。

小室信介の『第一遊清記』では李鴻章を「目下十八省中第一流ノ人物⁴²」と高く評価しており、清国で時勢を理解する唯一の人物と認識していた。小室は、清仏戦争の戦況視察を目的として1884年に訪清し、その体験をもとに本書を執筆した。中国社会全般への批判が多い中で、李鴻章のみを例外的に高く評価している点は注目に値する⁴³。また本書には、天津の軍備や戦争遂行に対する具体的な記述も含まれており、その内容については後の軍事認識の章で再論する。これは、紀行文が李の権勢に注目し始めたことを示し、同時に日本政府の外交戦略もこれに呼応して変化し始めた。

曾根俊虎は1875年の紀行文で李の天津駐在に触れていたが⁴⁴、その外交権力には深入りしていなかった。ところが、1886年、伊藤博文宛の書簡では天津は李鴻章の根拠地と明言し、駐津領事には中国事情に精通した人物を充てるべきだと主張した⁴⁵。李との協力が日清関係に有益であると強調し、日本政府もそれに応じて派遣人事を見直した。派遣された原敬・荒川巴次には、外務省から李鴻章との関係強化が求められた⁴⁶。1888年刊黒田清隆による『漫遊見聞録』では、李鴻章を「威望ヲ以テ⁴⁷」と評しており、1880～90年代の紀

行文では彼の外交的地位が一層重視されるようになったことがわかる。

1890年、駐華公使・大鳥圭介は外務大臣・青木周蔵への書簡で、駐華領事の頻繁な交代を避けるよう求め、天津の重要性を強調した⁴⁸。翌年の依光方成による『三円五十銭世界周遊実記』では「清国の法令は此の地より出で来る⁴⁹」と記され、原田藤一郎による『亜細大陸旅行日誌并清韓露三国評論』には「対外策の執行は皆な李鴻章氏の胸奥より出る⁵⁰」とある。これらは、旅行者にとって天津が政策決定の中核であり、李鴻章が対外政策の実質的担い手と認識されていたことを示す。

日清国交樹立前後、日本の使節団は天津を北京への通過点と見なし、その外交機能や政治的影響力にはさほど注目していなかった。しかし、1880年代に入ると、李鴻章の権勢拡大に伴い、紀行文における天津の評価は変化を見せ始める。1890年代には、李の地位や天津の国際的役割、日清関係への影響が頻繁に論じられ、天津は清国外交の中核として明確に位置づけられるようになった。こうした認識の推移は、日本の対清政策において天津が戦略的要衝と見なされるようになった過程を示している。

三、日清修好条規締結から日清戦争前における日本人紀行文の天津の経済認識

1871年に『日清修好条規』が締結され、天津は日本人に開かれた通商港となった。1873年の条約発効により、日本人は天津への合法的な渡航と経済調査が可能となり、天津は軍事・外交のみならず経済の観察対象としても重要な位置を占めるようになった。本条規は日清戦争により失効するが、それまでの約二

十年間に、日本人による天津経済の観察は次第に深化し、やがて体系的な把握へと展開した。本章では、当該時期の日本人紀行文をもとに、天津経済に対する認識の特徴とその変遷を分析する。

(一) 中国経済に対する関心の深化と紀行文の記述目的

本研究で整理した1871年から1894年の日本人紀行文21篇のうち、14篇が天津経済に言及している。この事実は、日本人が同地の経済状況に強い関心を寄せていたことを示す。天津は華北の経済的中心であり、日本人にとっても注目すべき地域であった。本節では、各時期における紀行文の記述を時系列で整理し、その経済調査の背景と目的を明らかにする。

1870年代の紀行文では、天津経済への言及はまだ限定的であった。例えば、満川成種の『支那通商必携』は清国との貿易振興を目的とした実務指向の著作である。著者は大蔵省官員として中国を訪れ、通商交渉や内陸部の調査に従事した経験をもとに本書を執筆した。序文では「互市貿易ハ富国ノ要務強兵ノ根源ナリ」と述べている。また、「貿易ヲシテ盛大ナラシムルハ支那ノ通商ヨリ先ナルハナシ」と述べ、中国との通商が日本の対外貿易の最優先課題であると強調している⁵¹。さらに、凡例では本書の主な読者層を清国との交易を志す実業家とし、必要な基礎情報を提供することを目的としている⁵²。一方、曾根俊虎の『北支那紀行』では塩業や物産、租界経済に触れる記述が見られるが、あくまで軍事調査が主目的であり、経済観察は補助的である⁵³。

1880年代に入ると、清仏戦争を背景に、日本政府は中国の内情把握を強化し、多くの調査団や視察者を派遣した。この時期多くの紀行文には、「通商」や「市場」、「経済調査」

などの目的が明示され、内容も多岐にわたるようになる。井上陳政は『禹域通纂』の序文において、「利済通商莫切於此（通商の利益と民生の安定において、これほど重要なものは他にない）」と述べ、対清通商の重要性を強調している。また、彼は日本政府の命を受けて清国を訪れ、広範かつ深層的な調査を行い、その成果を編纂し実用に供することを志した⁵⁴。すなわち、本書は対清政策を念頭に置き、制度・産業・風俗に関する情報を網羅的に整理した実務的な対清認識資料として編纂されたものである。

黒田清隆は日本の陸軍軍人・政治家であり、天皇の命を受けて清仏戦争の実情を視察するため清国に赴き、その調査結果を『漫遊見聞録』としてまとめた。同書の序文では、清国との通商の重要性が強調されており、日本政府がこの好機を逃さず、日清貿易の発展を積極的に主導すべきであると主張している。また、漢語に通じ、清国事情に精通した人材の育成の必要性にも言及しており⁵⁵、本書が対清通商政策や対外実務を視野に入れて編纂された実用的資料であることが読み取れる。

仁礼敬之は、清国との通商を志す日本人が事前に市場状況を十分に調査しないまま撤退に追い込まれる現状に問題意識を示し、自著『北清見聞録』をその商況把握のための実地的参考資料として編纂したことを序文で明言している⁵⁶。本書もまた、対清貿易政策や通商実務に資する実用的記録として位置づけられる。

1890年代に入ると、調査の担い手は政府・軍部から民間へと広がり、実業家や銀行関係者による視察が活発化した。依光方成の『三円五十銭世界周遊実記』は、庶民の生活や労働の描写を通じて、殖産興業による国力増強の必要性を訴えるものであり⁵⁷、著者の強い問題意識がうかがえる。安東不二雄は日本の

財政学者であり、1892年に横浜正金銀行の委嘱を受けて清国に赴き、財政制度の実地調査を行った⁵⁸。『支那漫遊実記』はその滞在中の見聞を基に編纂された紀行文である。想定読者は明示されていないが、通商や中国事情に関心を持つ知識層を意識した書物であると考えられる。末広重恭は、自由民権派の政論家として1892年に清国・朝鮮・ロシアを歴訪し、その見聞を『北征録：附・共遊草』（以下、『北征録』と略称する。）としてまとめた。同書では、日本の国際的立場を理解するには周辺諸国の情勢把握が不可欠であるとの問題意識が示されており、商人や政治を志す者も本書を読むべきであると述べている⁵⁹。原田藤一郎の具体的な人物像は不明であるが、『明治以降日本人の中国旅行記』によれば、彼は中国社会および経済に関する情報を収集し、その紀行文『亜細大陸旅行日誌并清韓露三国評論』は、実業家や外交官に向けて実用的知見を提供することを意図している⁶⁰。

もっとも、この時期においても政府・軍部による経済調査は継続されていた。『清国通商総覧』は、荒尾精が設立した日清貿易研究所によって編纂された実務資料であり、度量衡・物産・関税・制度法令などを網羅する「通商の要覧」としての性格を有している。序文では、軍事や歴史に関する記述を意図的に排除し、貿易実務への有用性を重視する方針が明示されており⁶¹、本書もまた対清経済政策を支える実践的情報集として位置づけられる。

さらに、参謀本部編纂課による『東亜各港誌』も軍部に属するものである。本書は東アジアの主要港湾に関する実地調査をもとに、地理・交通・港湾施設・租界・人口などを詳細に記述している。緒言では隣接諸国の情勢把握の必要性が強調されており⁶²、軍部主導による編纂ではあるが、商業関係者の活用も視野に入れた実用的資料であったといえる。

こうした動きは、経済調査が単なる知的探求ではなく、国家戦略と結びついた実務的行為であったことを物語っている。

上記により、1870年代から1890年代にかけて、日本人の中国经济への関心は、断片的観察から体系的な調査・戦略的評価へと質的に転換していった。紀行文はその変化を映す記録媒体であり、天津が日本にとってどのように価値づけられていたのかがわかる。

(二) 天津の貿易と交通：日本人紀行文の観察

天津はその優れた地理的条件により、1870年から1894年にかけて日本人紀行文において華北経済の中心かつ北京の門戸と広く認識されていた。また、南北の物流をつなぐ要衝としての役割を担っていた⁶³。南北運河の貫通により、天津は単に京師と結びつくだけでなく、沿海地域の商品が華北市場へ流入するための重要な中継地となった。港には商船が集まり、商業活動が活発であった⁶⁴。

天津の都市的地位に関しても、日本人紀行文では単なる貿易港を超えた中核都市として評価されていた。とりわけ1880年代以降、天津に対する認識は一層明確になり、都市機能の多様性が繰り返し強調されている。たとえば、『支那総説』は天津を「北地熱鬧ノ最ト称ス⁶⁵（北地で最も賑やかな場所と称されている）」と称し、『三円五十銭世界周遊実記』は「清国第二の都会⁶⁶」と記す。『清国通商総覧』もまた、天津を「貿易上の要地」にとどまらず、「政治上の枢区（政治的中枢）」として位置づけ⁶⁷、政治的中枢としての側面にも言及している。『支那漫遊実記』もまた、天津を「清国商業の千術万策の淵源⁶⁸」と記し、商業政策の中枢として捉えていた。こうした記述は、前節で論じた天津の国際的地位に対する再認識とも連動しており、日本人にとっ

て天津は経済と政治の両面において北清の中核たる都市とみなされていたことがうかがえる。

一方で、天津の交通環境に対する批判的な視点も見られる。『清国地志卷1』や『禹域通纂』、『清国通商総覧』には、冬季における水運の停止や、天津を通る主要水路である白河の浅さと水路の狭さは、物流の障害としてしばしば言及された⁶⁹。『支那総説』と『北支那朝鮮探検案内：附・朝鮮事件由来』（以下、『北支那朝鮮探検案内』と略称する。）には、大船が天津まで到達できず、小舟への積み替えが必要になるなど⁷⁰、近代的港湾としての課題が浮き彫りになっていた。

それでも日本人調査者は、天津の交通条件が将来的に改善される可能性に期待を寄せていた。1886年、李鴻章が石炭輸送の便宜を図るために鉄道建設を計画すると、日本側もこれを肯定的に受け止めた。井上陳政や黒田清隆、参謀本部などは、鉄道の整備が天津の経済発展を加速させると予測している⁷¹。実際、鉄道開通後の紀行文には、商人の往来や物資流通の活性化に触れる記述も見られ、天津が物流・経済の結節点としての機能を一層強化していたことが確認できる。『清国通商総覧』はこれを裏づけるかのように、「鉄道の開通以来日に月に繁盛に赴き⁷²」と記し、交通インフラの整備が都市の商業活性化に直結していることを示唆している。

天津に関する経済および交通の記述は、港湾都市としての可能性と課題を併せて描きつつ、その将来性に対しては一貫して楽観的な見方が共有されていた。

(三) 天津の対外貿易と日本商人の市場困難

前節で論じた天津の貿易機能や都市的地位に対し、本節ではそのなかにおける日本商人の参入状況と困難に焦点を当てる。開港以

降、天津は租界を中心に対外貿易を展開し、商業都市として発展を遂げた。日本人紀行文では、租界経済の実態とその将来性、さらには日本商人の市場参入状況が継続的に観察されている。

曾根俊虎は、英仏租界の立地や構造を詳細に記録し、その発展は横浜と東京の關係に似ると予測した⁷³。また、『支那地誌』は天津の貿易が「未タ興旺ナルニ至ラズト雖トモ曆年其昌ナルノヲ加ルノ景況アリ⁷⁴（まだ本格的に繁栄しているとはいえないものの、年を追うごとに次第に活況を呈しつつある様子が見られる）」と述べ、貿易活動が持続的に拡大している様子を捉えている。『東亜各港志』も同様に、租界の発展が将来的な貿易拡大の原動力となると評価し⁷⁵、実際に『禹域通纂』『漫遊見聞録』『清国通商総覧』などは輸出入貿易の拡大傾向を統計とともに報告している⁷⁶。

しかし、貿易の拡大にもかかわらず、日本商人の天津市場での立場は弱く、さまざまな困難に直面していた。1880年代まで、日本商人が天津にほぼ存在していなかった理由について黒田清隆⁷⁷や仁礼敬之⁷⁸は、資本金の不足や短期的経営による信用構築の困難を指摘している。この状況に対し、黒田は国家による支援を提案し、仁礼は陶磁器市場の調査を通じた商機の開拓を訴えた。

このような問題意識は、1890年代に入るとさらに強まり、依光方成は「徒らに武人的気風に誇りて商業的の習気に乏しく、一国立脚の基本を軽んずるを思へば、豈に寒心に粟するを覚へざるにハあらざるか⁷⁹」と述べ、日本人が商業活動を軽視し、国家経営の根本を怠っていることへの強い危機感を示した。ここには、経済活動を支える人的・制度的基盤の欠如に対する深い懸念が表れている。『清国通商総覧』は、ようやく天津に進出し

た三井物産や楽元堂、武斎号などの商店が、茶葉・薬品・綿布のほか、理髪業や洗濯業にも従事していたことを伝えており⁸⁰、商人たちが現地市場に適応べく多角的な事業展開を模索していた様子がうかがえる。これは、従来の商業的未成熟への批判を受けて、日本商人が新たな経営形態を試みていた一例ともいえる。

また、『支那漫遊実記』『北征録』などは、日本商人の失敗要因として、短期利益志向、信用制度の未整備、本社と現地支店の意思疎通の不統一を挙げ、現地調査の強化と信頼できる人材の派遣を提言している⁸¹。一方、『亜細大陸旅行日記並清韓露三国評論』では、天津領事・荒川巳次の見解を引用し、無資本・未熟練の商人による安易な進出を戒め、堅実な経営による着実な展開の必要性を強調している⁸²。さらに同書では、「本港に邦人充満し、貿易上に外交上に充分の勢力を得たらんには…⁸³」と述べられており、天津市場の支配が経済的利益のみならず、対清関係全体を左右する戦略的要素と捉えられていたことが分かる。

しかし現実には、日本商人の天津市場における影響力は限定的であった。『北支那朝鮮探検案内』によれば⁸⁴、当時天津に居住する日本人はごく少数であり、租界内での日本人経営の店舗も限られていた。また、モンゴル産羊毛の取引においては、欧米商人が大きな利益を上げる一方で、日本商人はコスト面や取引慣行への対応に苦慮し、継続的な商業展開に至らなかったとされる。さらに、当時の航行規制により日本からの輸送も制限されており、制度的・物流的な制約も大きかった。こうした記述は、日本商人が国際競争と制度環境の両面で不利な立場にあったことを裏付けている。

このように、日本人は天津の経済的潜在力

を高く評価しつつも、実際の市場進出においては数々の障壁に直面し、その克服のために国家戦略としての支援や人材育成の必要性を紀行文を通じて訴えていた。

日清修好条規締結から日清戦争前における日本人の天津経済への関心は、当初の断片的な観察を経て、しだいに戦略的視点を含んだ調査へと移行した。物産や交通への基礎的な記録に始まり、1880年代には政府・軍部、さらに1890年代には民間の関与が拡大し、多角的な把握が進められた。天津はその過程で、単なる貿易港ではなく、日本の対清構想における拠点として捉え直されるようになった。ここで言う「対清構想」とは、清国における経済的影響力を拡大し、将来的な市場支配や通商優位の確保を目指す一連の戦略的な構想を指す。紀行文は、当時の知見を整理し知識層や関係者に共有される媒体として、その認識の形成に一定の役割を果たしたと考えられる。

四、紀行文における「天津の軍事調査」

天津は明代以来、首都・北京の防衛拠点として戦略的な地位を占めてきたが、近代に入ると西洋軍事技術の導入とともに、その重要性はますます高まった。1871年の日清修好条規締結以降、日本人は天津の軍事施設や兵力配置に強い関心を抱き、1890年代初頭に至るまで継続的に調査を行っている。

曾根俊虎をはじめ、岡千仞、参謀本部、井上陳政、後藤昌盛、長谷川雄太郎、七里恭三郎、波多野承五郎、杉山虎雄による天津機器製造局や大沽砲台に対する調査は、1870年代から20年以上にわたり続けられ、その関心は施設の規模や設備の視察にとどまらず、生産能力、警備体制、情報収集の実態にまで及ん

だ。さらに1880年代以降、日本人の注目は軍事教育機関や訓練制度にも広がり、清軍の近代化の実態に対する評価が深まっていく。

本章では、1870年代から1890年代までに記された紀行文をもとに、日本人が天津をどのように軍事的に捉えていたのかを検討する。分析は、軍事施設と軍事体系という二つの側面から進める。

(一) 天津の軍事施設

1. 天津機器製造局

1875年、海軍省の命により清国へ派遣された軍人曾根俊虎は、中国を実地調査し、その成果を『北支那紀行』にまとめた。中国研究者の範建明は、本書を軍事探偵的な記録と位置づけ、その記述の正確性と信頼性の高さを指摘している⁸⁵。本書の第一章の「天津総説」では、多方面から天津の都市的様相を精緻に描写しており、軍事のみならず都市構造や社会環境への関心も読み取れる。曾根俊虎による『北支那紀行』の中で、天津機器製造局の二大部門である海光寺製鉄局と河東製鉄局を視察し、その規模や設備の水準に強い関心を示した。彼は、海光寺製鉄局について「三十馬力ノ機械ヲ具ヘ、武器ハ論スルコト無ク、総テ製鉄ノ動作ハ為サザル所無シ⁸⁶（三十馬力の機械を備えており、武器の製造はもちろんのこと、製鉄に関わるあらゆる工程が網羅されている）」と記し、武器製造に必要な技術が一通り整っていることを確認した。

さらに河東製鉄局に対しては「該局ノ宏壮ヲ目撃シ、本邦ノ製鉄局ヲ顧思スレバ其小ナルコトヲ概嘆スルニ余有リ⁸⁷（この製造局の宏大で立派な様子を目撃し、わが国の製鉄局を思い返すと、その規模の小ささに自然と嘆息が漏れた）」と述べ、日本の軍需工業との格差に驚きを隠さなかった。また、英国製の弾薬製造機に触れた際には「其動力ノ雄製、

実ニ称観スベシ⁸⁸（その動力設備の雄大さ・優秀さは、まさに称賛に値する）」と評し、清政府が積極的に西洋技術を導入している点に注目している。

これらの記述から、曾根は天津の軍需産業を高く評価しつつも、日本側の工業力に対する危機感も抱いていたことがうかがえる。彼の紀行文は、清国の軍事工業化が単なる模倣にとどまらず、実用段階に進んでいることを日本に伝えようとする意図があった。

1880年代以降、日本人による天津機器製造局の調査は一層詳細かつ組織的なものとなった。『禹域通纂』⁸⁹はその一例であり、曾根俊虎の『北支那紀行』に比して記述の密度や情報の精度において格段に高い水準を示している。また、漢学者である岡千仞が1884年の訪中時に記した未刊の手稿⁹⁰には、工場の区分、主要施設の構造、生産能力などが詳細に記されており、単なる視察記録を超えた軍事的分析の色彩を帯びている。とりわけ注目すべきは、岡千仞の手稿に記された情報が、『支那地誌』⁹¹における記述と極めて類似している点である。『支那地誌』は、1870年代末に創設された大日本帝国陸軍の軍令機関・参謀本部によって編纂された地誌資料であり、軍事的視点から中国各地の地理・軍事・政治・経済・社会状況を調査・整理した、実用性を重視する戦略的文書であると位置づけられる。その凡例には、編纂にあたって欧米諸国および日本人の紀行や報告が広く参考にされたと明記されている⁹²。実際に岡の記録と一致する用語・数値・施設名が多数確認されることから、その調査内容が参謀本部により何らかの形で参照された可能性がある。これらの記述は、日本軍による対清戦略の情報基盤が、紀行文を通じて着実に整備されつつあったことを示唆していると考えられる。

1890年代に入ると、こうした軍事情報の体

系化はさらに進展する。『東亜各港誌』には天津機器製造局の詳細が新たに加筆された⁹³。『清国軍備総覧』⁹⁴には、天津機器製造局の生産品目や雇用状況、作業時間、責任者に至るまでのデータが更新されている。1894年に出版した『清国軍備総覧』は、清国に渡航した長谷川雄太郎と七里恭三郎による共著であり、長谷川は上海にて岸田吟香のもとで中国語や中国事情を学び、のち参謀本部に所属して通訳官を務めた人物であり⁹⁵、七里は1887年に清国へ留学し、のちに軍務にも携わった経験を有する⁹⁶。清国軍備の概況を平易にまとめた実務的資料である。巻頭の「辨言」にもある通り、軍機を避けつつ広く流通させることを意図しており⁹⁷、軍事関係者や対清実務層への情報提供を目的としていたと考えられる。また『北支那朝鮮探検案内』では、初めて製造局への立ち入り方法に触れ、「領事館に照会を求むるか或いは出入商人に随ひて入局すべし⁹⁸」と記されており、このような記述からは、製造局に対する清政府の管理体制が比較的緩やかであった可能性もうかがえる。

これらの変化は、日本による天津軍需施設調査が、初期の観察的視察から、戦略的情報収集と実務的分析へと質的に転換していったことを示している。軍事機密に対する清側の防備の甘さも、日本の調査活動の深化を支える一因となった。

2. 大沽砲台

大沽砲台は、首都防衛の要衝として清政府が1816年に大沽口の南北兩岸に設置した軍事施設であり、以後の対外戦争の教訓を踏まえて、継続的な改修と強化が進められた。

日本人による初期の調査は1870年、柳原前光らによって開始された。『使清日記』には「台上有三位洋鉄大砲…砲台共有五座⁹⁹（台上有洋式の大砲が三門据えられており…砲

台は全部で五基ある)」と記されており、清軍がすでに洋式砲台を備えていたことが分かる。一方、柳原は駐屯兵が視察団に対して全く警戒心を示さなかったことに言及しており、砲台の実効的な防備力に疑問を抱いていたことがうかがえる。

1875年には曾根俊虎が大沽砲台を再調査し、「大沽、北塘ノ両砲台ハ北京ノ咽喉ニシテ精兵鋭卒多ク該所ニ屯ス¹⁰⁰（大沽・北塘の両砲台は北京の要衝にあたる防衛線であり、優れた兵士たちが多数駐屯している）」と記して、その地政学的重要性を強調した。曾根は翻訳官への賄賂や商人への変装、早朝の潜入など¹⁰¹、あらゆる手段を用いて砲台内部の情報を探ろうとしており、その調査は極めて執拗であった。また、『北支那紀行』をはじめとする記録から、日本人を中核とし、中国人を主な情報要員、外国人を補助要員とする多層的・国際的な情報収集網の存在を指摘する研究もある¹⁰²。

1880年代には、後藤昌盛が大沽砲台を「砲台中第一ノ壯観ニシテ¹⁰³」と絶賛し、構造の堅牢さに驚嘆した。しかし、1890年代に入ると、評価のニュアンスに変化が見られる。『北支那朝鮮探検案内』では、「数度の敗衄に懲り、セメントを以て之を増築せり¹⁰⁴」と記されており、清軍が過去の敗北を受けて砲台の補強を進めたことがうかがえる。また、同書には「砲台の内部は決して外人の見るを許るさざる所なれば熱心者は太沽の南岸に上陸し外部を視察するを以て満足すべし¹⁰⁵」とあり、外国人の立ち入りが制限されていた事情もうかがえる。これらの記述からは、砲台の外観の印象を通じてその防衛体制の限界を推察しようとする態度や、透明性の欠如に対する疑念も読み取れる。

さらに同書には、「東洋の運命を冥想し日章國旗を此砲台の下に翻へすの時を沈思せば

無限の感慨は政治家の胸に集ることもあらん¹⁰⁶」といった表現も見られ、視察の場が単なる軍事施設の確認にとどまらず、東洋の命運や軍旗の翻る日を想起させる空間として認識されていたことが分かる。『北支那朝鮮探検案内』の共著者である波多野承五郎は、新聞『時事新報』の記者を経て外務省に入り、天津領事に任命された人物である¹⁰⁷。こうした著者の経歴を踏まえれば、同書における砲台描写には、単なる防衛評価を超えた戦略的含意が読み取れる。すなわち、少なくとも本書においては、大沽砲台が単なる防衛拠点ではなく、将来的な帝国政策の関心が向けられるべき戦略地点として意識されていたことがうかがえる。

以上を踏まえると、大沽砲台に対する日本人の関心は、初期の規模・構造の確認から始まり、次第に情報収集体制の整備へと進み、1890年代には、実戦力への懐疑が強まるとともに、大沽砲台を将来的な軍事行動の対象地点、すなわち帝國的関心の矛先として捉える傾向が強まっていった。もっとも、こうした認識はあくまで一部の著者に限られた傾向ではあるが、それでも当時の日本における中国観や戦略的関心の深化を読み解く手がかりとなり得るだろう。

(二) 日本人による天津の軍事体系の調査

1. 軍事教育と軍隊訓練

1880年代初頭、李鴻章は天津において天津水師学堂（1881年）や天津武備学堂（1885年）を相次いで創設し、近代的軍事人材の育成を進めた。これに伴い、日本人の紀行文にも、天津の軍事教育機関に関する関心が反映され始める。

『禹域通纂』には、各学堂の設立目的や課程内容、教官構成、経費などの詳細が記されており、軍事教育を代表する福州船政学堂お

よび天津水師学堂について、「清朝ノ欧学採用ニ於テカヲ尽セリト謂フヘキカ、然トモ未タ以上ノ学校ヨリ有用ノ俊才ヲ輩出シ国家ノ倚頼ニ供セシヲ聴カズ¹⁰⁸（清朝が西洋の学問の導入に努力を尽くしていると言えるかもしれない。しかし、これらの学校から有能で実用的な人材が輩出され、国家の柱として活躍したという話は、まだ聞かれない）」と評している。すなわち、西洋軍事学術の導入努力には一定の評価を与えつつも、その実効性には懐疑的な見方があった。

一方、『清国軍備総覧』には、より組織的な視点から、学堂における外国人教官の配置や技術訓練、学生数や訓練制度の詳細が記録されている¹⁰⁹。特に、天津水師学堂出身の嚴復がフランス人教官から「第一流ノ人物¹¹⁰」と高く評価されていたことは、個人レベルでの成果として注目された。嚴復は実際には福州船政学堂の出身であり、天津水師学堂の卒業生ではないが、1881年に天津水師学堂の教授に就任している¹¹¹。したがって、彼の評価は、『清国軍備総覧』の著者たちに西洋軍事教育の成功例として受け止められていた可能性がある。

しかしながら、同書では北洋水師の軍事教育制度について、全体として批判的な評価が示されている。軍官養成における外国人教官への過度な依存、教育権限をめぐる内紛、さらに福州出身者による将官ポストの独占といった郷党的人事運用などの問題が詳述されており、制度そのものへの明確な疑念と批判が読み取れる¹¹²。すなわち、軍事教育制度の整備と実戦能力の向上との間には乖離があるとの認識が強く、嚴復のような人材の出現は例外的な成功に過ぎず、制度全体の実効性に対する根強い懐疑が示されていた。

以上のように、両書は記述の視点や目的に差異があり、『禹域通纂』が通商実務を前提

とした制度整理的記述であるのに対し、『清国軍備総覧』は軍事的関心に基づく実地調査の成果を重視していた。しかし、いずれも清朝の軍事教育制度の効果に対して疑っている点で一致していた。すなわち、天津における軍事教育は日本人の目には、部分的な成果は認められながらも、依然として模倣にとどまり、独自の軍事的強化には至っていないと映っていた。

2. 清軍の戦闘力評価

日本人が天津の軍事に注目する際、もっとも関心を寄せたのは、李鴻章の指揮下にある軍隊の戦闘力であった。とりわけ、欧米列強との比較において清軍がどれほど実戦的能力を持ちうるのかという点が、紀行文の主要な評価軸となっていた。

曾根俊虎は、天津の軍備を最も体系的に調査した日本人の一人であり、「該地ハ即チ清国第一ノ要地、北京ノ咽喉ニシテ、敵兵之レヲ抜ケバ、帝城戦ハズシテ白旗ヲ翻スニ至ラン¹¹³（この地はまさに清国における最も重要な場所であり、北京の喉元にあたる。もし敵軍がここを突破すれば、首都北京は戦わずして降伏し、白旗を掲げることになるだろう）」と記して、天津が首都防衛の要として極めて重要であることを強調している。彼は製鉄局や砲台のみならず、兵營の配置や兵士の訓練、生活環境の詳細を記録し、実際に戦争が起きた場合の展開を想定していた。

清軍に対する評価は人によって大きく異なる。後藤昌盛は李鴻章配下の軍隊を肯定的に評価したのに対し¹¹⁴、小室信介による『第一遊清記』は「清国ノ海軍タル者ハ…脳髓神経ナキノ人ノ如シ到底死物ノミ¹¹⁵」と酷評し、実戦において脅威とはならないと断じている。岡千仞も「若徒学彼退歩武。雄視国内。或有之。未可与欧米接鋒。¹¹⁶（清軍は西洋式の歩兵操練を形式的に学んではいるが、

それによって国内では威勢を示せるかもしれないものの、欧米列強と正面から対抗するには到底及ばない」と述べ、形式的な操練の導入は認めながらも、欧米列強と対峙する力はないとした。

1890年代に入ると、日清戦争が迫る中でこのような批判的認識はより顕著となる。李文海・康沛竹によると、参謀本部の川上操六は1893年に中国・朝鮮を実地調査し、清軍は脅威に値しないと確信したという¹¹⁷。同時期の紀行文にも同様の懐疑が濃く現れている。依光方成は、李鴻章が北洋艦隊を総括しながらも専制的な統治を行ったと批判している¹¹⁸。末広重恭も李鴻章の人事が同郷主義に偏っているため、地元兵士の戦力を十分に引き出せていないと批判している¹¹⁹。

また、『清国軍備総覧』における北洋水師の戦力評価は、表面的な整備状況や艦艇の近代化を認めつつも、実戦能力の点では深刻な限界があったとする姿勢が一貫している。たとえば、指揮系統の不統一や職権をめぐる内部対立、外人教官との権限摩擦などが頻発し、組織としての一貫性や即応性に欠けていたとされる¹²⁰。

このように、1890年代に至るまでの日本人の認識において、清軍は一見近代化を遂げつつあるように見えても、実質的な戦闘能力は依然として疑問視されていた。後藤による肯定的評価も存在するものの、他の多くの記録と比較すると、それは例外的な傾向であると言える。彼は留学生として清国を訪れており、軍事専門家としての視点を持っていなかった。実際、彼の『在清国見聞随記』は、農村風景や観光地などに関する素朴な描写が中心であり、記述の深度も限定的である。そのため、彼の清軍に対する比較的好意的な見方は、同時代の主流的な認識とは異なるものであったと考えられる。1890年代に入ると、

このような清軍に対する蔑視的な態度は紀行文の中で広く共有される共通認識となっていった。

総じて、日本人の天津に対する軍事認識は、1870年代から1890年代にかけて、視察の関心から戦略的評価へと段階的に深化していった。軍需施設に対する調査は一貫して重視され、その内容も、初期の設備観察から生産能力・警備体制に及ぶ実務的分析へと発展した。さらに1880年代以降には、軍事教育や清軍の訓練制度も注目されるようになり、近代化の実態を多角的に把握しようとする姿勢が強まった。そして1890年代には、清軍に対する脅威評価は著しく低下し、日本軍部の判断とも一致するに至った。

五、日本人紀行文における天津社会

これまで、天津の国際的地位、経済的役割、軍事的戦略性について検討してきたが、それらに加えて、日本人紀行文には天津社会に関する多様な観察も確認できる。本章では、1871年の日清修好条規の締結から1894年の日清戦争勃発までの紀行文を対象とし、記述の中で繰り返し言及された社会的な要素に注目し、「居住環境と租界の発展」「都市管理と社会秩序」「社会風俗と人情」「官僚統治と教育」といった四つの側面から、日本人の天津社会に対する認識を分析する。

本章の考察においては、特に『清国紀行桑蓬日乗』および『北支那朝鮮探検案内』の記述が中心的な分析対象となるため、以下にその概要を簡潔に紹介しておきたい。前者は1871年に使節団に随行した漢学者・石幡貞による紀行文であり、附言によれば、当初は私的な記録であったが、出版に際しては公務関連の内容を削除し、風土や民俗に関する記述を中心に構成された。和訳・訓読が施され、

読者層としては広く一般の知識人が想定されていたことも明記されており、啓蒙的意図が強く、臨場感を高めるために実地で描いた挿絵も収められている¹²¹。後者『北支那朝鮮探検案内』は、前天津領事の波多野承五郎と新聞記者・杉山虎雄の共著であり¹²²、序文こそ存在しないが、その構成と文体から、主として一般旅行者や知識人層を対象とした旅行案内的性格を有すると考えられる。天津については都市構造、風俗、商業活動、軍事施設など多岐にわたる記述が見られ、社会認識の分析においても重要な参照資料となる。

(一) 居住環境と租界の発展

日本人紀行文において、天津の居住環境はおおむね否定的に描かれた。『使清日記』は「沿河人家概皆泥屋¹²³（川沿いの民家は、概ねすべて土壁の家屋であった）」と記し、庶民住宅の粗末さとともに、「公署廟觀及富戸。以瓦盖之¹²⁴。（官庁や廟宇、そして富裕な家屋のみが瓦で屋根を葺いている）」として社会階層の明確な格差を指摘している。『清国紀行桑蓬日乗』は「屋傾朽朽無修飾、不耻茅茨太古風¹²⁵（家屋は傾き、柱は朽ちており、装飾もなく、茅葺きの古風な様式を恥じることもない）」と批判し、都市発展の停滞を嘆いた。1894年の『北支那朝鮮探検案内』も「皆な泥を以て塗りたれば¹²⁶（すべて泥で塗り固められている）」と述べ、20年以上にわたる住環境の改善の乏しさを浮き彫りにしている。

富裕層の住宅や商館についても、西洋や日本と比べて見劣りすると評価されていた。『北支那紀行』は「富貴者ハ瓦造ヲ以テシ、中人以下ハ土泥或ハ芦草ヲ以テス¹²⁷（富裕層は瓦造りの家を用い、庶民以下の者は、土や泥、あるいは葦や草を材料としている）」と記し、社会階層ごとの居住環境の違いを描写

するが、上層住宅も多くは平屋建てであり、都市化の水準は依然として低かった。また、『北支那朝鮮探検案内』では、天津の富裕層が建てた商館である山西会館の装飾を評価した。李鴻章邸の外観が「陰気で牢屋のようだ」と描写され、日本の大臣官邸が「噴水が響き、花鳥風月に満ちた快適な空間」であるとし¹²⁸、強烈な対比がなされている。このような対照により、著者は、清国有数の権力者の住居でさえ文明の象徴とは程遠く、自国の近代性とは到底比較にならないと強調している。

一方、租界に対する評価は対照的である。『清国紀行桑蓬日乗』は「英米等ノ領事館ミナ華潔ナリ…地方官署ヲ觀ルニ鄙陋廢頽セリ¹²⁹（英米の領事館はいずれも華やかで清潔である……一方、地方の官庁を見ると、みすぼらしく荒れ果てていた）」と記し、外国施設の整然さと官署の荒廃を対比させる。1890年代にはこの対比がさらに鮮明となり、『清国通商総覧』は英仏租界の建築を「頗る壯麗なり¹³⁰」と評し、『北支那朝鮮探検案内』はヴィクトリア公園での体験を日本の故郷の安らぎに重ねている¹³¹。このような記述からは、当時の日本人が自国を欧米列強と同列に位置づける一方で、中国の都市構造に対しては明確な蔑視の視線を向けていたことがうかがえる。

紀行文に描かれた天津の住環境は、「貧困な現地住宅」と「整然たる租界」という対照的な構図で表現されていた。このような二元的な描写は、天津社会における格差を浮き彫りにするとともに、日本人が自国と欧米の都市整備を文明の基準として位置づけ、その視点から清朝の都市統治能力を否定的に評価する傾向を強めていたことがうかがえる。

(二) 都市管理と社会秩序

日本人紀行文における天津の都市管理は、多くの場合で否定的に描かれている。街路の狹隘さ、不潔さ、悪臭、乞食の存在などが繰り返し指摘され、特に夏季には衛生環境の悪化が深刻であるとされた¹³²。また、天津の飲用水は長年にわたり汚染されており、住民の健康に悪影響を及ぼしていた¹³³。

ただし、一部には例外的な評価も見られる。『北征録』には「天津城内の意外に清潔なるなり¹³⁴」との記述があるが、意外という表現が示しているように、その文脈には皮肉を帯びたニュアンスが含まれている。著者は天津訪問の直前に朝鮮を経由しており、その際、「清潔なる日本より突然と天津に赴けば必ず非常の不愉快を感じしならん¹³⁵」と知人に言われたと記している。この記述からも、日本国内の都市と比べて天津は依然として劣るという前提が透けて見える。

また、アヘンの蔓延も、日本人が天津社会の秩序の乱れとして強く意識した問題である。『北支那紀行』では、「鴉片煙ノ盛ナルコト上海ヨリ甚ダシ¹³⁶（アヘンの盛行は上海以上である）」と記され、天津がすでにアヘン問題の深刻な地域であることが示されている。1890年代に入ると、アヘンの社会的影響に対する分析もより具体的になり、『三円五十銭世界周遊実記』や『東亜各港誌』では、アヘンが労働者層を精神的・経済的に蝕み、貧困や破産をもたらしていると指摘している¹³⁷。

衛生環境の劣悪さやアヘンの蔓延に関する記述を通じて、日本人は天津社会の混乱を清国制度の無能と結びつけて捉えた。こうした視点は、単なる環境批判にとどまらず、清朝の統治力そのものへの不信として現れている。

(三) 社会風俗と人情

日本人紀行文における天津の社会風俗に対

する描写は、否定的な批判と一定の肯定的評価の双方を含み、多面的な視点を持っていた。

日本人は一般に、天津人を進取の気性に欠け、功利的・狡猾であると見なしていた。『清国紀行桑蓬日乗』は「概ネ寛ニシテ鈍ナリ¹³⁸（おおむね寛大ではあるが、鈍重である）」と述べ、『北支那紀行』は「狡猾ニシテ義理ノ何物タルヲ知ラズ¹³⁹（狡猾で、義理というものが何かをまったく理解していない）」と記している。『清国通商総覧』も「風俗は頗る不良に属し狡猾にして¹⁴⁰（社会風紀はきわめて劣悪で、ずる賢くて狡猾である）」と記し、天津人の性質を否定的に評価している。

一方で、一定の肯定的評価も見られる。『三円五十銭世界周遊実記』は、天津人が儉約の意識を持ち、生活のために貯蓄に努めていると記し、また抑圧に順応する姿勢も社会的順応に長けている特質として理解している。同書は、天津人が適切な教育を受ければ、優れた商人・貿易家となり得る潜在性を認めている¹⁴¹。『北征録』では、天津商人が契約を重視し、信用の失墜が商機の喪失につながると記されており¹⁴²、一定の商業倫理があることが認識されていた。前章「経済認識」においても指摘したように、依光方成や末広重恭の紀行文には、いずれも殖産興業や対外経済関係への関心が強く示されている。したがって、天津人の資質に対する純粋な賞賛というよりは、むしろ日本人自身の経済的関心や市場理解を深めるための実用的視点から導き出された観察結果であると考えられる。

天津の風俗に関して、日本人は強い違和感を抱いていた。『清国紀行桑蓬日乗』には「市人尻ヲ連ネテ脱糞ス毫モ憚ル色ナシ¹⁴³（街の人々が並んでしゃがみ込み、排便しており、まったく恥じる様子がない）」と記され、市民の排泄習慣を衝撃的なものにとらえている。『北支那紀行』¹⁴⁴は、庶民が上位者に礼を

尽くす社会礼儀の存在を指摘しつつも、それが形式に過ぎないと暗に示唆している。

纏足についても、日本人はこれを中国社会の遅れた伝統の象徴と見なし、繰り返し否定的に描写した。とりわけ、曾根俊虎の『北支那紀行』および石幡貞の『清国紀行桑蓬日乗』では¹⁴⁵、天津における実見に基づき纏足を描写しており、後者では「時ニコレヲ開ケバ其腐臭近ツク可ラズ、蓋シ異習ナリ（時に纏足を開けると、ひどい悪臭がして近づくこともできない。まさに異様な習慣である）」「蹣跚蹣跚トシテ乞丐不具ノ人ニモシカズ、陋習ノ靡スル所亦此極ニ至ルカ（蹣跚として、乞食や障害者にも及ばない。悪しき習慣がここまで蔓延したのかと驚かされる）」と記し、纏足を非文明的な陋習として強く否定している。

一方、『支那総説』『漫遊見聞録』『清国通商総覧』といった他の紀行文では、纏足は天津の風俗としてではなく、中国全体に共通する陋習として批判的に取り上げられており、その痛苦さや奇異さ、残酷さが強調されている¹⁴⁶。これらの記述は天津という地域に限定された観察ではなく、中国社会の文明的後進性を象徴する存在としての纏足を描き出している。

こうした視点の背景には、明治維新後の日本社会における近代化意識があった。特に、政府による女子教育の推進や、身体を拘束する伝統からの脱却が進められていた日本において、纏足は進歩と保守の対比の中で強く否定される対象となった¹⁴⁷。日本人はこの風習の否定を通じて、自国の文明的優位性を再確認し、中国社会を文化的に劣る存在として位置づける傾向を強めていた。

天津人に対する日本人の評価は、おおむね否定的であったが、一部には商業倫理や儉約精神に肯定的な言及も見られた。ただし、こ

うした評価も、純粋な賞賛というよりは、日本人自身の経済的関心や市場理解を前提とした実利的な視点に基づくものと考えられる。風俗面では、纏足や排泄習慣に象徴される伝統への違和感が強く、近代化を進める日本の価値観との対比の中で、天津の社会、ひいては中国社会を「変革の遅れた文化」として描出していた。

（四）官僚統治と教育

日本人紀行文において、天津の官僚統治と教育制度は概して否定的に描かれている。日本人は、天津の地方官僚が形式的な権威を誇示しながら、実際の行政能力に乏しく、統治も放任主義であると認識していた。また、教育の荒廃や科挙制度の限界も社会発展を阻害する要因として批判された。

『使清日記』は、「官員皆俗吏、只李鴻章、丁壽昌有文才耳¹⁴⁸（官員は皆、俗吏にして、ただ李鴻章・丁壽昌のみ文才あり）」と記し、李鴻章らを例外として、官僚の資質に疑問を呈している。『北支那紀行』でも、「道台或ハ府令等ノ出門セルヤ…数十人ノ従者ヲ伴ヘリ¹⁴⁹（道台や知府などが外出する際には、数十人の従者を引き連れていた）」と、地方官僚の過剰な威儀と形式主義が描かれており、統治の実効性が欠如しているとの印象を与えている。

加えて、天津の行政は放任主義的であるとする記述も見られる。『北支那朝鮮探検案内』は、三岔河口の混雑について、「中流船を通すの余地だに剩さず」「嘗て故塩田公使の舟に乗じて河口を上らんとする際、舟楫に遮られ、到底通過すること能はざるより、俄に急使を衙門に馳せ、其の由を告げたるに、胥吏来りて六間餘の鞭を以て船夫を殴ちたれば、船夫之に避易し、少しく通路を開きたるにより、辛ふじて通船することを得たりと云

ふ。放任主義の濫是に至りて極まれりと云ふべし。』¹⁵⁰と述べ、河口の交通が無秩序に陥り、地方官が場当たりの暴力解決を図ったことを批判している。つまり、日本人は天津の官僚統治を権威の誇示と行政の無策という二重の観点から否定的に評価していた。

教育についても、紀行文ではその荒廃が繰り返して指摘された。『使清日記』には「文廟荒圯。学中寥々。生員亦不多。¹⁵¹（文廟は荒れ果て、学舎には人影まばらで、生員もまた多くはない）」とあり、教育の制度としての不十分さが明示されている。『三円五十銭世界周遊実記』では、「人民教育の貴重すべきを知らざるを以て…智識啓発せず¹⁵²（人民教育の重要さを理解していないために、知識が啓発されないのである）」と述べ、教育軽視の風潮が社会の啓蒙と発展を妨げているとされる。

以上のように、日本人は天津の官僚統治と教育を通じて、中国社会の停滞と制度的な限界を読み取っていた。形式に偏重する統治姿勢と、啓蒙を欠く教育環境の両面は、天津社会の近代化が進まない理由として一体的に捉えられていた。

全体として、日本人紀行文における天津社会の描写は、具体的な観察に基づきながらも、近代日本人の文明観や価値判断を色濃く反映したものであった。街路や住宅の不整備、公衆衛生や都市管理の欠如、官僚の形式主義と行政の放任主義、教育制度の停滞、さらには纏足などの伝統風習に対する違和感に至るまで、社会全般に対する否定的な評価が一貫して示されていた。一方で、勤勉さや商業的信用に関しては一定の肯定も見られたが、それらは「例外」として位置づけられ、天津社会の全体的な印象を覆すには至らなかった。すなわち、こうした肯定的記述も、天津人の資質に対する純粋な賞賛ではなく、

日本人自身の経済的関心や市場理解を促す実用的な観察の一環と考えられる。

このような認識の蓄積によって、天津はしばしば近代化の遅れを象徴する都市として描かれ、社会面から清国全体の文明的限界を浮き彫りにする素材となった。国際的地位・軍事・経済においては認識の深化と変化が見られた一方、社会に対する否定的な視点は終始一貫しており、その安定性こそが、日本人の文明観や文化的優越意識を支える基盤となった。天津社会の後進性を強調する記述は、清国の制度や社会構造に対する懐疑を深め、日本人の対清観における文明的な優越意識を強化する一因となったと考えられる。

まとめ

本研究では、1870年の使節派遣による天津訪問から、1894年の日清戦争勃発までの約二十年間における紀行文を対象とし、日本人の天津に対する認識がいかにも形成され、どのように変容したかを、国際的地位・経済・軍事・社会の四側面から考察した。

このような三期区分に基づく天津認識の変化を視覚的に整理したものが、以下の表Ⅱである。

初期には天津は北京への通過点として捉えられていたが、李鴻章の外交活動や租界整備、市場調査の進展などを契機に、外交・経済・軍事の各分野における戦略的評価が次第に高まった。他方、社会的側面では都市環境や制度、風俗への否定的な理解が終始一貫しており、蔑視的視線が持続していた。

さらに、天津認識の変遷を三期に分けて捉えると、より明確な傾向が見て取れる。①日清修好条規締結直後（1870～1880年代初頭）には、天津は北京への通過点とされ、外交的関心は限定的であった。経済・軍事に関する

表Ⅱ 1870年～1894年における天津認識の時系列的変化

時期	国際的地位	経済	軍事	社会
日清修好条規締結直後（1870～1880年代初頭）	外交中枢としてはまだ認識されていなかった。	観察は断片的で、実地調査は少なく、日本人商人の進出も限定的である。	軍事施設に対する基礎的な視察が中心、天津が軍事拠点であるとの認識が徐々に芽生え始める。	都市環境や行政制度、風俗に対する評価は、一貫して否定的。街路の不整備や行政の形骸化、教育制度の停滞などが頻繁に取り上げられ、文明の遅れを象徴する都市として描かれ続けた。
1880年代以降	清国対外政策の中核として再認識される。	市場構造、交通条件、租界経済に関する具体的な調査が増加し、経済都市としての戦略的価値に対する関心が高まる。	軍事教育制度や兵制に関する記述が増加し、調査の戦略的性格が強まる。清軍の訓練状況や統制力への疑念が表れ始める。	
日清戦争前夜（1890-1894）	清国の政策決定の実務拠点として認識され、日本の対清外交戦略における要衝として位置づけられるようになる。	官民双方による経済調査が活発化、日本人商人の進出状況にも注目が集まる。清国北部の経済中枢・対清経済戦略の拠点と認識される。	清軍の装備・兵站・兵士の質・教育制度に対する懐疑が強まり、戦闘能力の欠如が強く意識される。	

記述も断片的にとどまり、社会面では未開・不潔さが強調されたが、曾根俊虎による詳細な軍事視察など、戦略的関心の萌芽も一部に認められる。②1880年代以降には、天津の国際的地位が李鴻章の外交活動とともに再評価され、経済調査が具体化し、軍事情報の精緻化が進展した。社会面では引き続き否定的描写が中心を占め、秩序の欠如や風俗の粗野さといった蔑視が持続した。③日清戦争前夜（1890～1894年）には、天津は外交・経済・軍事の中核としての認識が定着し、清軍の脆弱性を前提とした戦略的理解が深まった。社会認識においても制度的後進性への批判が強まり、文明観に基づく否定的評価が一層明確となった。

上記の四側面を総合すると、日本人紀行文における天津認識は、単なる異文化への興味や通過的印象にとどまらず、国際的中核としての天津像、経済的戦略地点、軍事的観察対象、文明的対照項という多層的なイメージに基づいて構成されていた。その認識は、一都

市としての天津を超えて中国全体の在り方を評価する枠組みへと展開し、日本の対清政策や戦略判断における中国観の構築とも密接に関わっていたといえる。

対象とした紀行文の著者は、政府関係者・軍人・留学生・知識人など多岐にわたるが、来清目的の差異を超えて天津への共通した関心が認められる。多様な主体による観察が積み重ねられたことにより、天津認識は時代とともに深化・変容し、近代日本人が隣国・清国をいかに理解しようとしたかを示す具体的な事例となった。

国際的地位・軍事・経済の各側面においては、1870年代から1890年代にかけての国際情勢や対清関係の展開に応じて、天津は清国における戦略・経済的要衝として再評価され、観察も次第に精緻化していった。軍事面では、兵制や戦闘能力に対する懐疑が強まり、清軍に対する批判的な認識が次第に浸透していった。他方、社会的側面では、文明観に根ざした否定的理解が一貫して示され、そうし

た蔑視の視線が日本人の優越意識を支える心理的基盤ともなっていた。すなわち、天津への多角的な関心は、肯定的評価・戦略的分析・制度批判・蔑視的感情といった複数の視点を交錯させながら蓄積され、結果として清国全体を理解するための枠組みの一端を形成していたといえる。

本研究は、王鳴彦・于晴晴・李鈴・潘月剛らが示した紀行文の文化的機能や優越意識形成という視点を引き継ぎつつ、それを特定の地域と時期に即して実証的に再構成したものである。抽象的な中国観にとどまらず、天津という具体空間を通して、対清理解の構造化過程を可視化した点において、既存研究の補

完と深化に資するものといえよう。

なお、本稿では1870年代から1894年までに刊行された紀行文を対象とし、日清戦争勃発前における天津認識の構造を分析した。しかし、日清戦争以降、天津は日本の帝國的進出の拠点としてその重要性をさらに増し、紀行文においても軍事的・経済的・社会的視点からの記述が引き続き蓄積されている。今後の課題としては、1895年以降の資料を対象とすることで、天津認識の継続と変容の実態を明らかにし、本稿で示した認識構造がその後いかに展開していったのかを実証的に検討することが求められる。

【注】

- ¹ 「西学」とは、清朝の洋務運動において提唱された概念であり、主に張之洞の著作『勸学篇』などに見られる表現で、西洋の科学技術や学問体系を指す言葉である。
- ² 「学堂」とは、清政府が洋務運動期に近代の人材を養成する目的で設立した新式教育機関を指す。
- ³ 張利民「從軍事衛所到經濟重心—天津城市主要功能的演變」、城市史研究、2004、20-37頁。
- ⁴ 安藤彦太郎『日本人の中国観』、勁草書房、1971
- ⁵ 小島晋治『近代日中関係史断章』、岩波書店、2008
- ⁶ 並木頼寿『日本人のアジア認識』、山川出版社、2008
- ⁷ 楊棟梁『近代以來日本の中国観第一卷総論』、江蘇人民出版社、2012
- ⁸ 劉岳兵『近代以來日本の中国観第三卷（1840-1895）』江蘇人民出版社、2012
- ⁹ 陳奉林「近代日本人游記所見中華文明與中日關係」、中外關係史研究第一輯、2023、77-103頁。
- ¹⁰ 張明杰「明治時期日本人の中国游記文獻綜述」、日語学習与研究2015年第5期、2015、55-60頁。
- ¹¹ 王鳴彦「近代遊華日本人眼中的中国形象重塑」、上海師範大学、修士論文、2012
- ¹² 于晴晴「日本明治時期來華遊紀中的中国形象」、揚州大学、修士論文、2019
- ¹³ 李鈴「明治時期日本人中国遊紀中的中国認識研究」、北京外国語大学、博士論文、2021
- ¹⁴ 潘月剛「近代日本人旅華遊紀中的中国観」、吉林大学、修士論文、2013

- ¹⁵ 李文璐「近代來華外国人視域中的天津城市文化」、文学与文化2018年第四期、2018、125-136頁。
- ¹⁶ 靳佳萍、井媛、周宝玲「日本人筆下の天津租界」、哲学文史研究2017年第一期、2017、109頁。
靳佳萍、張桂麗、周媛「19世紀末20世紀初日本人筆下の天津管窺」、遼寧經濟管理幹部學院 遼寧經濟職業技術學院學報2017年第一期、2017、52-54頁。
靳佳萍「近代日本人筆下の中國茶葉貿易—以天津爲例」、福建茶業2016年第六期、2016、53-54頁。
- ¹⁷ 姚紅「一九二一年芥川龍之介の天津体験」、日本語と日本文学／筑波大学日本語日文学会 編、2010、26-40頁。
- ¹⁸ 陳淑梅「文学者が見た近代中国（一）—金子光晴と天津—」、明治大学日文学研究会、2011、65-77頁。
- ¹⁹ 李焯『都市鏡像近代日本文学的天津書写』、天津古籍出版社、2016
- ²⁰ 張明杰「明治時期日本人の中国游記文獻綜述」、日語學習与研究2015年第5期、2015、55-60頁。
- ²¹ 楊棟梁『近代以來日本の中国観第一卷総論』、江蘇人民出版社、2012
- ²² 表Ⅰは、筆者が国立国会図書館、宮内公文書館などの蔵書を調査し、書名・著者・出版年・著者の属性・訪中時期・天津に関する記述内容の六項目を整理したものである。『使清日記』は宮内庁書陵部の所蔵資料である。『北支那紀行』および『在清国見聞隨記』は、小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』第2巻（1997年、ゆまに書房）および第11巻（1997年、ゆまに書房）に

- 収録されており、第2巻は山口大学図書館にて、また第11巻は山口県立山口図書館にて、それぞれ閲覧・閲覧した。上記以外の書籍はすべて国立国会図書館デジタルコレクションより取得した。
- ²³ 劉亦実「漢口楽善堂内幕揭秘」、文史月刊、2004、44-46頁。
- ²⁴ 李新偉「甲午中日戦争時期日本対華諜報活動評述」、長江論談、2015、88-92頁。
- ²⁵ 劉曉峰「花落春猶在一畝曲園の日本学生」、読書第12期、2008、112-113頁。
- ²⁶ 東洋文庫近代中国研究委員会『明治以降日本人の中国旅行記（解題）』、東洋文庫、1980、3頁。
- ²⁷ 寇振鋒「甲午戦争と日本軍用漢語熟探究——以日本軍用漢語教科書出版版为中心」、2017年第一期、2017、107-116頁。
- ²⁸ 呂思勉『中国近代史』、民主与建設出版社、2015、62頁。
- ²⁹ 天津教案とは、天津で発生した反キリスト教事件である。民衆によるフランス領事館の襲撃と宣教師殺害が発生し、最終的に十数名のフランス人および中国人信者が死亡した。
- ³⁰ 柳原前光『使清日記 上/明治3年』、3-5頁。
- ³¹ 「日清修好通商条約締結一件/柳原権大丞品川大録清国出發前書類」JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B06151017700、日清修好通商条約締結一件/柳原権大丞品川大録清国出發前書類(2.5.1.6-1)(外務省外交史料館)
- ³² 柳原前光『使清日記 中/明治3年』、12頁。
- ³³ 柳原前光『使清日記 中/明治3年』、7頁。
- ³⁴ 柳原前光『使清日記 中/明治3年』、21頁。
- ³⁵ 皮埃尔辛加拉維魯著、郭可訳『万国天津、商務印書館、2020、13-14頁。
- ³⁶ 柳原前光『使清日記 上/明治3年』、16-17頁。
- ³⁷ 柳原前光『使清日記 上/明治3年』、23-24頁。
- ³⁸ 柳原前光『使清日記 中/明治3年』、9-12頁。
- ³⁹ 柳原前光『使清日記中/明治3年』(9月8日、9月22日、9月24日)および『使清日記下/明治3年』(10月14日、10月18日)の記録を読むと、使節団が李鴻章と五回会見していたことが理解できる。
- ⁴⁰ 柳原前光『使清日記 中/明治3年』、12-13頁。
- ⁴¹ 邱帆「日本政府対「天津外交」的認識与運用」、史林、2019、133-142頁。
- ⁴² 小室信介『第一遼清記』、山中喜太郎、1885、19頁。
- ⁴³ 東洋文庫近代中国研究委員会『明治以降日本人の中国旅行記（解題）』、東洋文庫、1980、2-3頁。
- ⁴⁴ 曾根俊虎『北支那紀行』、小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』第2巻、ゆまに書房、1997、30頁。
- ⁴⁵ 伊藤博文『秘書類纂 外交篇』中巻、1936、224頁。(曾根俊虎奉総理大臣伊藤伯閣下書、1886年)
- ⁴⁶ 原敬文書研究会『原敬関係文書』第一巻、1984、293頁。(原敬宛榎本武揚書簡1885年6月10日)
- ⁴⁷ 黒田清隆『漫遊見聞録 上』、農商務省、1888、11頁。
- ⁴⁸ 清国各口駐在領事屢々更迭之儀ニ付在同国公使ヨリ申出ノ件」JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B15100726900、外交官領事官其他ノ職務関係雑件 第一巻(6.1.2.2_001)(外務省外交史料館)
- ⁴⁹ 依光方成『三円五十銭世界周遊実記』、博文館、1891、25頁。
- ⁵⁰ 原田藤一郎『亜細亞大陸旅行日誌并清韓露三国評論』、青木嵩山堂、1894、36頁。
- ⁵¹ 満川成種『支那通商必携』、酔軒書屋、1873、緒言
- ⁵² 満川成種『支那通商必携』、酔軒書屋、1873、凡例
- ⁵³ 曾根俊虎『北支那紀行』、小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』第2巻、ゆまに書房、1997、の内容により。
- ⁵⁴ 井上陳政『禹域通纂 上』、大蔵省、1888、序
- ⁵⁵ 黒田清隆『漫遊見聞録 上』、農商務省、1888、1-2頁。
- ⁵⁶ 仁礼敬之『北清見聞録』、亜細亞協会、1888、1-3頁。
- ⁵⁷ 依光方成『三円五十銭世界周遊実記』、博文館、1891、201-213頁。
- ⁵⁸ 東洋文庫近代中国研究委員会『明治以降日本人の中国旅行記（解題）』、東洋文庫、1980、5頁。
- ⁵⁹ 末広重恭『北征録：附・共遊草』、青木嵩山堂、1893
- ⁶⁰ 東洋文庫近代中国研究委員会『明治以降日本人の中国旅行記（解題）』、東洋文庫、1980、5-6頁。
- ⁶¹ 日清貿易研究所『清国通商総覧』、日清貿易研究所、1892、1-13頁。
- ⁶² 参謀本部編纂課『東亜各港誌』、参謀本部、1893、緒言
- ⁶³ 満川成種『支那通商必携』、酔軒書屋、1873、11-12頁。
- 曾根俊虎『北支那紀行』、小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』第2巻、ゆまに書房、1997、30頁。
- 金子弥兵衛『支那総説 卷之1』、中近堂、1883、24頁。
- 末広重恭『北征録：附・共遊草』、青木嵩山堂、1893、86-87頁。
- 原田藤一郎『亜細亞大陸旅行日誌并清韓露三国評論』、青木嵩山堂、1894、36頁。
- ⁶⁴ 井上陳政『禹域通纂 上』、大蔵省、1888、198頁。
- 日清貿易研究所『清国通商総覧』、日清貿易研究所、1892、144頁。
- 参謀本部編纂課『東亜各港誌』、参謀本部、1893、

- 59-61頁。
- ⁶⁵ 金子弥兵衛『支那総説 卷之1』、中近堂、1883、24頁。
- ⁶⁶ 依光方成『三円五十銭世界周遊実記』、博文館、1891、25頁。
- ⁶⁷ 日清貿易研究所『清国通商総覧』、日清貿易研究所、1892、147頁。
- ⁶⁸ 安東不二雄『支那漫遊実記』、博文館、1892、94頁。
- ⁶⁹ 岸田吟香『清国地志 卷1』、岸田吟香、1882、29頁。
井上陳政『禹域通纂 下』、大蔵省、1888、608頁。
日清貿易研究所『清国通商総覧』、日清貿易研究所、1892、149-150頁。
- ⁷⁰ 金子弥兵衛『支那総説 卷之1』、中近堂、1883、24頁。
波多野承五郎、杉山虎雄『北支那朝鮮探検案内：附・朝鮮事件由来』、林平次郎、1894、5-6頁。
- ⁷¹ 井上陳政『禹域通纂 上』、大蔵省、1888、608頁。
黒田清隆『漫遊見聞録 上』、農商務省、1888、49頁。
参謀本部編纂課『東亜各港誌』、参謀本部、1893、61頁。
- ⁷² 日清貿易研究所『清国通商総覧』、日清貿易研究所、1892、147頁。
- ⁷³ 曾根俊虎『北支那紀行』、小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』第2巻、ゆまに書房、1997、30頁。
- ⁷⁴ 参謀本部管西局『支那地誌 卷1-6 卷五』、参謀本部、1887、78頁。
- ⁷⁵ 参謀本部編纂課『東亜各港誌』、参謀本部、1893、62-63頁。
- ⁷⁶ 井上陳政『禹域通纂 下』、大蔵省、1888、608頁。
黒田清隆『漫遊見聞録 上』、農商務省、1888、37-38頁。
日清貿易研究所『清国通商総覧』、日清貿易研究所、1892、151-155頁。
- ⁷⁷ 黒田清隆『漫遊見聞録 上』、農商務省、1888、47-49頁。
- ⁷⁸ 仁礼敬之『北清見聞録、亜細亜協会』、1888、102-103頁。
- ⁷⁹ 依光方成『三円五十銭世界周遊実記』、博文館、1891、31頁。
- ⁸⁰ 日清貿易研究所『清国通商総覧』、日清貿易研究所、1892、148頁。
- ⁸¹ 安東不二雄『支那漫遊実記』、博文館、1892、88-91頁。
末広重恭『北征録：附・共遊草』、青木嵩山堂、1893、91-94頁。
- ⁸² 原田藤一郎『亜細亜大陸旅行日誌并清韓露三国評論』、青木嵩山堂、1894、36-37頁。
- ⁸³ 原田藤一郎『亜細亜大陸旅行日誌并清韓露三国評論』、青木嵩山堂、1894、37頁。
- ⁸⁴ 波多野承五郎、杉山虎雄『北支那朝鮮探検案内：附・朝鮮事件由来』、林平次郎、1894、15-17頁、23-24頁。
- ⁸⁵ 範建明『北中国紀行・清国漫遊志』訳者序、中華書局、2006、9頁。
- ⁸⁶ 曾根俊虎『北支那紀行』、小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』第2巻、ゆまに書房、1997、52頁。
- ⁸⁷ 曾根俊虎『北支那紀行』、小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』第2巻、ゆまに書房、1997、57頁。
- ⁸⁸ 曾根俊虎『北支那紀行』、小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』第2巻、ゆまに書房、1997、56頁。
- ⁸⁹ 井上陳政『禹域通纂 下』、大蔵省、1888、543頁。
- ⁹⁰ 岡千仞著、張明傑整理『観光続記』、中華書局、2009、244頁。『観光続記』は、漢学者・岡千仞が1884年の訪中をもとに記した未刊の手稿であり、張明傑によって整理・翻訳された。原本は東京都立中央図書館に所蔵されているが、筆者は当該資料を直接閲覧することができなかつたため、張明傑『観光紀遊・観光続記・観光遊草』（中華書局、2009年）に収録された翻訳整理版を使用した。
- ⁹¹ 参謀本部管西局『支那地誌 卷1-6 卷四』、参謀本部、1887、58-59頁。
- ⁹² 参謀本部管西局『支那地誌 卷1-6 凡例』、参謀本部、1887、1頁。
- ⁹³ 参謀本部、参謀本部編纂課『東亜各港誌』、参謀本部、1893、57頁。
- ⁹⁴ 長谷川雄太郎、七里恭三郎『清国軍備総覧』、日清協会、1894、163-164頁。
- ⁹⁵ 劉建雲「清末の日本語教育と広州同文館」、中国研究月報第53巻第12号、一般社団法人中国研究所、1999年、1-14頁。
- ⁹⁶ 岡部三智雄「名倉松窓と劉銘伝——清末台湾における井戸開削事業をめぐって」、『台湾史研究』第11号、台湾史研究会、1995年3月、9-22頁。
- ⁹⁷ 長谷川雄太郎、七里恭三郎『清国軍備総覧』、日清協会、1894、辨言
- ⁹⁸ 波多野承五郎、杉山虎雄『北支那朝鮮探検案内：附・朝鮮事件由来』、林平次郎、1894、21頁。
- ⁹⁹ 柳原前光『使清日記 下/明治3年』、22-23頁。
- ¹⁰⁰ 曾根俊虎『北支那紀行』、小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』第2巻、ゆまに書房、1997、82頁。
- ¹⁰¹ 曾根俊虎『北支那紀行』、小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』第2巻、ゆまに書房、1997、185-234頁。
- ¹⁰² 曲曉燕「近代日本人遊記中的山東認識」、山東師

- 範大学、博士論文、2020
- ¹⁰³ 後藤昌盛『在清国見聞随記』、1884、小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』第11巻、ゆまに書房、1997、231頁。
- ¹⁰⁴ 波多野承五郎、杉山虎雄『北支那朝鮮探検案内：附・朝鮮事件由来』、林平次郎、1894、4頁。
- ¹⁰⁵ 波多野承五郎、杉山虎雄『北支那朝鮮探検案内：附・朝鮮事件由来』、林平次郎、1894、4頁。
- ¹⁰⁶ 波多野承五郎、杉山虎雄『北支那朝鮮探検案内：附・朝鮮事件由来』、林平次郎、1894、6頁。
- ¹⁰⁷ 塩野崎佐門次 編『静岡県第五区候補者波多野承五郎君小伝』、塩野崎佐門次、1980年、12頁・18頁。
- ¹⁰⁸ 井上陳政『禹域通纂 下』、大蔵省、1888、367頁。
- ¹⁰⁹ 長谷川雄太郎、七里恭三郎『清国軍備総覧』、日清協会、1894、150-152頁。
- ¹¹⁰ 長谷川雄太郎、七里恭三郎『清国軍備総覧』、日清協会、1894、151頁。
- ¹¹¹ 劉曉琴「嚴復与天津水師学堂再探」、近代史研究2024年第6回期、40-59頁。
- ¹¹² 長谷川雄太郎、七里恭三郎『清国軍備総覧』、日清協会、1894、96-99頁。
- ¹¹³ 曾根俊虎『北支那紀行』、小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』第2巻、ゆまに書房、1997、30頁。
- ¹¹⁴ 後藤昌盛『在清国見聞随記』、1884、小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』第11巻、ゆまに書房、1997、233頁。
- ¹¹⁵ 小室信介『第一遊清記』、山中喜太郎、1885、22頁。
- ¹¹⁶ 岡千仞『観光紀遊 卷46、燕京日記卷下』、1886、13頁。
- ¹¹⁷ 李文海、康沛竹「甲午戦争与日本間諜」、清史研究第四期、1994、9-19頁。
- ¹¹⁸ 依光方成『三円五十銭世界周遊実記』、博文館、1891、25-26頁。
- ¹¹⁹ 末広重恭『北征録：附・共遊草』、青木嵩山堂、1893、82-86頁。
- ¹²⁰ 長谷川雄太郎、七里恭三郎『清国軍備総覧』、日清協会、1894、96-99頁。
- ¹²¹ 石幡貞『清国紀行桑蓬日乗 卷之上』、有所不為齋、1871、1-2頁。
- ¹²² 波多野承五郎、杉山虎雄『北支那朝鮮探検案内：附・朝鮮事件由来』、林平次郎、1894、表紙
- ¹²³ 柳原前光『使清日記 中／明治3年』、5頁。
- ¹²⁴ 柳原前光『使清日記 中／明治3年』、6頁。
- ¹²⁵ 石幡貞『清国紀行桑蓬日乗 卷之上』、有所不為齋、1871、21-22頁。
- ¹²⁶ 波多野承五郎、杉山虎雄『北支那朝鮮探検案内：附・朝鮮事件由来』、林平次郎、1894、13頁。
- ¹²⁷ 曾根俊虎『北支那紀行』、小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』第2巻、ゆまに書房、1997、22頁。
- ¹²⁸ 波多野承五郎、杉山虎雄『北支那朝鮮探検案内：附・朝鮮事件由来』、林平次郎、1894、25-27頁。
- ¹²⁹ 石幡貞『清国紀行桑蓬日乗 卷之上』、有所不為齋、1871、16頁。
- ¹³⁰ 日清貿易研究所『清国通商総覧』、日清貿易研究所、1892、147頁。
- ¹³¹ 波多野承五郎、杉山虎雄『北支那朝鮮探検案内：附・朝鮮事件由来』、林平次郎、1894、18頁。
- ¹³² 石幡貞『清国紀行桑蓬日乗 卷之上』、有所不為齋、1871、25-26頁。
- 曾根俊虎『北支那紀行』、小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』第2巻、ゆまに書房、1997、25-26頁。
- 日清貿易研究所『清国通商総覧 第1編』、日清貿易研究所、1892、146頁。
- ¹³³ 石幡貞『清国紀行桑蓬日乗 卷之上』、有所不為齋、1871、25-26頁。
- 参謀本部管西局『支那地誌 卷1-6 卷五』、参謀本部、1887、76頁。
- ¹³⁴ 末広重恭『北征録：附・共遊草』、青木嵩山堂、1893、87頁。
- ¹³⁵ 末広重恭『北征録：附・共遊草』、青木嵩山堂、1893、89頁。
- ¹³⁶ 曾根俊虎『北支那紀行』、小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』第2巻、ゆまに書房、1997、23頁。
- ¹³⁷ 依光方成『三円五十銭世界周遊実記』、博文館、1891、30-31頁。
- 参謀本部編纂課『東亜各港誌』、参謀本部、1893、58頁。
- ¹³⁸ 石幡貞『清国紀行桑蓬日乗 卷之上』、有所不為齋、1871、18頁。
- ¹³⁹ 曾根俊虎『北支那紀行』、小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』第2巻、ゆまに書房、1997、19頁。
- ¹⁴⁰ 日清貿易研究所『清国通商総覧』、日清貿易研究所、1892、148-149頁。
- ¹⁴¹ 依光方成『三円五十銭世界周遊実記』、博文館、1891、28-29頁。
- ¹⁴² 末広重恭『北征録：附・共遊草』、青木嵩山堂、1893、91-93頁。
- ¹⁴³ 石幡貞『清国紀行桑蓬日乗 卷之上』、有所不為齋、1871、26頁。
- ¹⁴⁴ 曾根俊虎『北支那紀行』、小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』第2巻、ゆまに書房、1997、20頁。
- ¹⁴⁵ 石幡貞『清国紀行桑蓬日乗 卷之上』、有所不為齋、1871、23頁。
- 曾根俊虎『北支那紀行』、小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』第2巻、ゆまに書房、1997、20頁。

¹⁴⁶ 金子弥兵衛『支那総説 卷之4』、中近堂、1883、55頁。

黒田清隆『漫遊見聞録 上』、農商務省、1888、23頁。

日清貿易研究所、『清国通商総覧 第2編』、日清貿易研究所、1892、80頁。

¹⁴⁷ 胡亜秋「明治時代における女性教育と社会進出の矛盾」、華中科技大学、修士論文、2015

¹⁴⁸ 柳原前光『使清日記 下／明治3年』、10頁。

¹⁴⁹ 曾根俊虎『北支那紀行』、小島晋治監修『幕末明治中国見聞録集成』第2巻、ゆまに書房、1997、23頁。

¹⁵⁰ 波多野承五郎、杉山虎雄『北支那朝鮮探検案内：附・朝鮮事件由来』、林平次郎、1894、27-28頁。

¹⁵¹ 柳原前光『使清日記 中／明治3年』、21頁、26頁。

¹⁵² 依光方成『三円五十銭世界周遊実記』、博文館、1891、29頁。